

第 26 回松本市平和祈念式典 『平和への思い』

○松本市立筑摩小学校 6 年 坂本 菜摘 さん

私は、小学校 3 年生のときに、「ちいちゃんのかげおくり」を授業で学び、衝撃を受けました。

戦争は、一瞬にして大切な家族を失ってしまう、とても恐ろしく、罪深いものです。

私のおばあちゃんは、生後 4 ヶ月のときに、ひいおじいちゃんが戦争のための飛行訓練で墜落し亡くなってしまいました。なので、ひいおじいちゃんの記憶が全くないそうです。しかも、奥さんの目の前で墜落し、それがショックで悲しかったことでしょう。

私たちは、戦争について知らないことがまだまだたくさんあります。体験談を聞いたり、資料を目にして、友達や家族と戦争の恐ろしさや命の尊さを語り合い、二度と戦争のない平和な世界であるようにしていきたいです。そして、今、学校に通えることや、友達と遊べること、おいしいご飯を食べられること、家族と笑って会話ができること、そんな身近な幸せに感謝して過ごしていきたいと思います。

平和な世界でありますように。

○松本市立旭町小学校 6 年 中澤 春空 さん

今回、この平和祈念式典に参加するにあたり、僕は戦争のことについていろいろ考えてみました。しかし、戦争の悲惨さなどは話には聞くものの、今の若い世代の人たちはあまり知りません。正直、僕もわからないことが多いです。そこでたくさん調べてみました。そうすることで、戦争への見方が大きく変わりました。そして、僕が調べたことを発表することで、他の若い世代の人たちにもその思いを少しでも知ってもらえると嬉しいです。

僕が主に調べてみたのは、原子爆弾についてです。この原爆は、たった一つの爆弾で何万人もの人の命を奪いました。調べを進めていく中で、いくつもの悲惨な状況がわかってきました。例えば、水筒やお弁当箱が焦げたり、強烈な熱風でボロボロの学生服など、たくさんあります。原子爆弾は 8 月 6 日に広島へ、9 日に長崎へと落とされました。どちらも、突然、強烈な光が差したと思った瞬間、ものすごい音がして、家全体が大きく揺れたそうです。逃げていく中でも、すでに息絶えた人々も多く、その人たちに混じって半死半生の人もたくさんいたそうです。やけどを負った人も、皮膚はただれ、まるでお化けのようで、「痛い、痛い」とずっと言っていたそうです。食べるものもあるわけではなく、土手の草を食べていたそうです。

ここまで調べたことを挙げてみましたが、僕の今の生活にはありえないことです。そこにいた人たちは、それだけ生きることに必死だったということです。ここからもわかるように、戦争で使われる兵器は、一瞬で、自分たちの住んでいる町を廃土と化してしまいます。幸いにも生き残った人にも、不安と痛みを与え続けてきました。この時代の人たちは、青春と呼ばれる時間も少なく、中学校に行けない人も多くいたと聞きました。戦争を経験した方々は、苦しかったろうし、本当に大変だったと思います。そのことを僕たちに教えてください。それが、語り継がれることに繋がり、これからの平和に繋がると思います。

今年で戦後76年になります。戦争は、家族、家、食べ物など、その人のすべてを奪いました。その辛さは計り知れません。こんなことは、これから先何年後でもあってはなりません。そして、その戦争が終わった今日8月15日という日を絶対に忘れてはいけません。今日という日を、平和を思って過ごそうと思います。

「平和を願っている」。何度も聞いた言葉です。僕も本当にそう思います。戦争はしてはいけません。そして、忘れてもいけない。これから先の平和を心の底から願っています。

○松本市立松島中学校2年 丸山 託史 さん

太平洋戦争が終戦してから今日で76年、戦争の記憶をお持ちの方も、少しずつですが少なくなってきていて、戦争であった出来事の継承も困難になってきています。ましてや、この1年は、新型コロナウイルスが流行し、各地の講演会など戦争の悲惨さを伝える機会が相次いで中止になっています。また、国と国との対立が深まったり、今でも紛争が続いている地域があったりします。

先が見通せないこの世の中だからこそ、もう一度過去にあった出来事に目を向けるべきではないか。私はそう思います。

太平洋戦争と聞いて、きっと誰しもが思い浮かべるものが、アメリカ軍が広島市と長崎市に投下した原子爆弾です。広島市で8月6日午前8時15分、長崎市で8月9日午前11時2分に炸裂したこの爆弾は、一瞬にして町を焼き尽くしました。人々は激しい熱風と強い放射能に襲われ、皮膚は焼けただれ、冷水を求めて、川や貯水池に飛び込んだ人も数多くいたそうです。実際に、広島での出来事を描いた「はだしのゲン」という本がありますが、初めて読んだ時には、あまりの惨状に思わず目を背けてしまいました。現在でも、原爆ドームなど、原子爆弾の悲惨さを今日に伝える遺構が大切にされています。また、原爆投下直後に降った、放射性物質を含む黒い雨によって健康被害を受けた人々を含め、多くの方が、今なお原爆の後遺症に苦しめられている事実があります。

これらのことから、私たちは、原子爆弾が広島や長崎に投下され、多くの人々が苦しみながら命を落とし、今でも苦しんでいる人がいるということを忘れてはならないと思います。

私たちは、10月に100年行事として、平和学習を目的とした東北信旅行に出かけます。そのために、事前に学習を進めてきました。

終戦直前に沖縄で起こり、多くの死者を出した沖縄戦も、そこで学習した内容の一つです。この沖縄戦によって約18万8000人の方々が亡くなったと伝えられています。しかし、このうち半数は一般の市民だったということに驚きを隠せません。さらに、その亡くなってしまった方たちの亡骸が道端や海岸に打ち捨てられていたと聞いたときは、思わず耳を疑いたくなりました。聞くだけでも恐ろしいのに、実際に目の前で見た人は一体どんな気持ちだったのでしょうか。

そもそも、なぜ、沖縄でこんなに犠牲が出てしまったのか。それは「日本軍の方針」にあります。日本軍は、本土を守るための防衛線として沖縄を位置づけたため、結果として戦いが激化し、多くの死者が出てしまったのです。また、私たちは松代大本営跡を見学しますが、その松代への大本営移転の時間稼ぎであったとも言われています。

大きな犠牲を払った策として、もう一つ、「特攻」が挙げられます。これは航空機などに爆弾や爆薬を積載して、敵艦に体当たりするというもので、絶対に生きては帰って来れないという人命を度外視した作戦でした。これによって、若いパイロットの命が次々に失われていきました。また、特攻隊だけではなく、戦争では数多くの若い命が失われました。私たちが行く無言館には、戦争で儚く散っていった学生たちの絵画が残されています。

このように戦争というのは、将来有望な若者たちや何の罪もない人達が亡くなっていたり、殺し合うことが日常茶飯事になっていたりする、とてつもなく恐ろしいものです。このようなことが、もう二度と起こらない平和な社会するためには、どうすればよいのでしょうか。私は、「忘れないこと」、そして、「思い出すこと」が重要だと考えます。広島、長崎、沖縄。有名な観光地です。ただ楽しむこともいいですが、そこで昔あった、恐ろしい出来事を思い出してみてください。

では、忘れないためにはどうすればいいのか。私たちのような若い世代が、記憶を受け継いでいけばいいと思います。私は、平和学習で松代大本営と無言館に行きますが、ただ見るだけではなく、見たことを昔の出来事と結びつけて記憶することで、その次の世代にも継承できるのではないのでしょうか。この先もずっと平和に過ごせるように願い、実行していこうと思います。

○松本秀峰中等教育学校3年 加治屋 智恵 さん

今、私の頭上には美しい空が広がり、きれいな空気が漂っています。当たり前のように鳥がさえずり、色とりどりの花が咲き、美しい景色、優しい先生、そして大切な家族に囲まれて生活しています。それはいつも通りの日常で、私は生まれてからずっと、そうした景色や

人たちの中で暮らしてきました。しかし、ひとたび戦争が始まれば、この平和な日常が失われることは知っています。そして、この生活が永遠に保証されたものではないことも知っています。また、こうしている今も、世界のどこかで差別や殺人、紛争や戦争が起きていることも承知しているのです。これまでの私は、頭の中ではそのことを認識していても、そうした事実を自分の問題として実感することはできないでいました。それらは、まるで別世界の出来事のように、どこか他人事のように思えるからです。

そんな私でも、ふとしたときに自分の存在や命について考えることがあります。自分が今、この場所で、こうして生きていられるのは、父と母がいたからであり、私の祖父や祖母たちが生きていてくれたからです。そんな風に考えるとき、私は遠くで暮らす祖父が電話越しに私に語りかけてくれた、祖父の幼少期の体験を思い出します。

祖父がまだ6歳だった、1940年の春、曾祖父の転勤のため、妹と弟2人、一家6人で、当時日本の植民地だった朝鮮半島のソウルに渡ったそうです。41年に、学生が国民学校に変わり、祖父はその1期生で、1年から終戦を迎える5年までソウルで過ごしました。祖父が3年の頃から、戦況が悪化し、食糧事情が窮迫し、4年生になると学校のグラウンドは食糧不足を補うために蕎麦畑に変わってしまったそうです。5年生になる頃には、男の先生が召集されてしまうので、担任が頻繁に代わり、児童にも勤労働員が課せられるようになりました。朝、学校に行くと、軍帽のあご紐の材料が教室の中央にどっさり積まれ、それを縫って、あご紐に仕上げる毎日だったそうです。

そして、45年8月15日の終戦日を、曾祖父は平壤（ピョンヤン）で迎えました。正午に、天皇陛下の玉音放送を聞いて日本の敗戦を知ったのです。その後、当時わずか10歳だった祖父は、その年に生まれた3ヶ月に満たない妹を、魚の木箱に紐づけた抱っこ籠を抱きかかえ、持てるだけの荷物を持ち、列車と船を乗り継いで命からがら日本に引き揚げてきました。

そして私は、今、無性に祖父のことを恋しく思うのです。まだ子供だった祖父が、家族を守りながら必死に生き抜いた姿が私の脳裏に浮かびます。私の存在があるのは、まぎれもなく、祖父が繋いでくれた命のおかげです。

また、もう一つ、忘れてはいけないことは、戦争への道を私たちは決して許してはいけないということです。私の祖父のように、戦時下を生き抜いた多くの人々が、本当は忘れたくないことを後生に引き継ぎ、決して風化させることがないように書き残し、語り続けています。これは、人々の中に、心からの平和への願いがあるからです。

私は今日も学校から帰り、家族から「お帰りなさい」と温かい声で迎われます。すると、私の心は穏やかになり、ふと外を眺めると、当たり前のように鳥がさえずり、色とりどりの花が咲き、美しい景色、優しい先生や友達、そして大切な家族が私を包み込みます。そうして私はまた、自分の内なる心に目を向け、祖父のことを思い出し、自分の中に自然とあふれてくる平和への思いに心を致します。

この世界を慈しむ気持ちで、私たちの地球の平和を願い、過去の戦争で失われた尊い命のことを、これから先も忘れないで私の心に刻みつけたいと思うのです。